

アンケート調査から見る音楽教師の音楽指導観

古山 典子⁽¹⁾・瀧川 淳⁽²⁾

Analysis of the survey results on the view of teaching music of elementary, junior high and high school music teachers

KOYAMA Noriko⁽¹⁾ and TAKIKAWA Jun⁽²⁾

We have conducted a questionnaire research to elementary, junior and high school teachers regarding views of music teaching.

As a result, we revealed following four points; 1) Teachers think school needs music classes, especially in elementary schools. 2) In music classes, teachers consider “enjoying music activity” is the most important factor in music teaching, however the rate decrease as the kinds of school gets higher. 3) Elementary school teachers feel difficulties in “teaching music”. And 4) Younger teachers tend to feel difficulties in “Selecting teaching materials and contents of teaching”.

Specialties of elementary school teachers are diverse and this shows some differences from the result of junior and high school teachers.

Keywords : questionnaire survey, views of teaching music, music teacher, classroom teacher

1 研究の背景と目的

我が国の学校教育は、文部科学省による「学習指導要領」を教育課程の編成における基準としており、当然音楽科も例外ではない。音楽を指導する教師（以下、「音楽教師」とする。）は、「学習指導要領」に基づく検定教科書や指導書を使用して題材を構成し、授業を行うことも多いが、実際には教師自身の音楽観や音楽指導観が、指導内容に多大な影響を与えていることは明白である。

音楽教育研究の分野において、教師の音楽指導観に関連する研究は、教師の意思決定に関する研究（八木, 1991；篠原, 1992）、あるいは教師や教育実習生の力量形成に関する研究（高見, 2012；2014；菅, 2002ほか）が散見できるものの、意思決定の根底にあり、

力量形成とも深く関わる教師の音楽指導観に関する先行研究は、筆者らの研究のほかには見当たらない。

教師の音楽指導観が授業そのものに与える影響が多大であるにも関わらず、その研究が十分ではないこと、また、教師がもつ価値基準が音楽観や音楽指導観と密接に結びついていることから、これまで筆者らは音楽教師の価値体系を明らかにすることを目的として研究に取り組んできた。この一連の研究は、学校教育と専門教育、また音楽と美術といった「芸術」の観点から、音楽科の教科内容を再考することを目指すものである。

これまで筆者らは、音楽専科教師と担任教師、音楽経験や教員歴、学校教育と音楽家及び美術家による専門教育との差異を視点として、学校教師の音楽指導観の解明に取り組んできた（古山, 2006；2009；古

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

⁽²⁾ 熊本大学教育学部音楽科

山・瀧川, 2008; 2009; 2014; 2015a; 2015b; 2015c; 2016)。

筆者らの一連の研究の中で、小学校教師には音楽専科教師であるか担任教師であるかを問わず、音楽そのものを追求することから、社会性や協調性といった人間教育の側面へと音楽科の意義をシフトして考える傾向が見られ、コミュニケーションが図れたり、他者の意見に共感したり、大勢の中で自分の役割を認識しながら充実感をもって音楽表現ができることを重視していることが明らかとなっている。

その一方で、インタビュー調査で明らかになった高校教師の音楽指導観には、小学校教師とは異なる特徴が見られた。それはすなわち、専門教育に類似する指導観、つまり芸術の質を追求する姿勢が強く表れる、という特徴である。ここから、前述した小学校教師の音楽指導観は、初等教育に携わる教師特有のものと位置付けることができる。

本稿は、これまでの筆者らの研究がインタビューやフィールドワークといった特定の教師、音楽家、美術家を対象とした質的な調査であったのに対して、アンケート調査を通して、小学校教師、中学校教師、高校教師の音楽指導観を把握しようとする、量的な調査に基づくものである。したがって本調査は、筆者らの一連の質的な研究の検証の一環と位置付けることができる。

このアンケート調査は、小学校教師と中・高の音楽教師の音楽観・音楽指導観にどのような傾向があるのか、また校種を超えて「教師」としての共通項があるのか、あるいはどのような差異があるのかを明らかにすることを意図している。ここから得られる知見は、音楽科教育の現状を描出し、音楽科のあり方、及び教員養成について再考するための重要な手掛かりとなるものと考えられる。

なお、本稿の執筆は、古山がⅠ、Ⅱ、Ⅲ-1、3(1)、(2)、(3)、4(1)及びⅣを、瀧川がⅢ-2、3(4)、4(2)を担当して行った。

Ⅱ アンケート調査の概要

1. 調査対象者・調査方法・アンケートの内容について

広島県内公立小学校、公立中学校、公立高校で音楽指導にあたる教師、及び熊本県内公立小学校教師を対

象に、無記名によるアンケート調査を行った。

広島県については県内のすべての公立小学校、中学校、高等学校を対象とした。アンケートを実施するにあたり、予めアンケート調査の目的と内容、回答の処理方法、回答用紙の取り扱いについて各教育委員会に明示し、協力を得た。その上で、郵送によって調査を実施した。

一方、熊本県での調査では、小学校教師を対象とした音楽研修会の場で了承を得てアンケート用紙を配付し、回答後にその場で回収を行った。

回答用紙は、選択肢による設問と自由記述による設問の双方とを組み合わせて、以下の7項目で構成した。

①回答者の属性に関すること

(性別、校種、専科・担任等の別、勤務校の規模、回答者の出身教員養成校の種類、音楽経験)

②各校種での音楽科の必要性について

③音楽指導で重視していること

④教材選択について

⑤音楽専科教員の必要性について

⑥音楽指導で困難に感じること

⑦教師となる者に大学で学ばせるべき知識や技術

本稿では、上記7項目の中から②、③、⑥の選択肢による回答内容と、①の校種、専科・担任等の別との関連を考察の対象とした。

なお、調査時期は、広島県は2016(平成28)年7月から8月にかけて、熊本県は同年8月である。

2. 有効回答率と回答者の内訳

アンケートの有効回答数は、広島県が297通(800通中、回収率37%)、熊本県が71通の計368通であった。なお、熊本県については前述した通り、小学校教師を対象とした音楽研修会でアンケートを配付・回収しているため、研修会の参加者数が回答数であり、回答者はすべて小学校教師である。

両県を合わせた回答者の内訳を表1に示す。

広島県の297通の内訳は、小学校教師による回答が209通、中学校

表1 回答者の校種別内訳

小学校教師	280通(76%)
中学校教師	63通(17%)
高校教師	19通(5%)
小・中一貫校教師	6通(2%)
計	368通

県はすべてが小学校教師からの回答である。

なお、小・中一貫校の教師からの回答はサンプル数が少ないため、本稿での分析では、主に小・中・高の教師による回答を対象とした。

III アンケート調査の結果と考察

1. 音楽科の必要性について

小学校・中学校・高校のそれぞれ校種において「音楽科は必要と思うか」を尋ねたところ、図1、図2、図3の結果となった。

すべての校種において「音楽科は必要」と答えた教師が多いことがわかる。とくに小学校については、小学校教師の92%、中学校教師の79%、高校教師の89%が、音楽科が必要だと「とても思う」と答えている。一方、学習者が小学校から高校へと上の校種になるにつれ、「まあ思う」の回答率が高くなっており、学年段階の低い学習者にこそ音楽科が必要だと教師が考えている傾向があることが明らかになった。

広島県の場合、アンケートの回答者の選定は、各学校長に委ねており、音楽専科教師を配置している学校ではその教師に、配置していない学校でも何らかの形で音楽経験のある教師、あるいは学校の中で音楽指導を比較的得意とする教師に回答を依頼したことが推察できる。また熊本県の回答者も、音楽研修会に参加している教師であるため、音楽に関心がある、または得意な教師が多いことが予想される。それゆえに、偏りがある可能性は否定できないが、小学校教師の92%が小学校に音楽科が必要だと「とても思う」と回答していることは、とくに初等教育において音楽科が果たす役割が大きいと教師が考えていることを示している。

この図1、2、3を比べると、小学校教師は、小から中、中から高にかけて、顕著に音楽科を「とても必要だ」とする割合が低くなっていることがわかる。反対に高校教師については、いずれの校種についても必要だと「とても思う」とする回答が高い。また、すべての教師が、自らが勤務する校種において「音楽科が必要」と考えていることも明らかとなった。

2. 音楽指導で重視していること

(1) 校種別

教師が音楽指導で重視している点について、小学校、中学校、高校に分けて見てみたい。教師には、音楽指

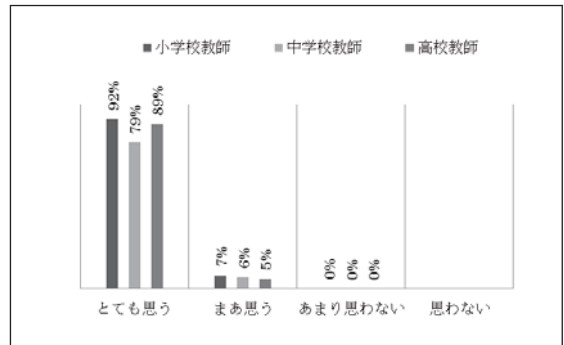


図1 小学校に音楽科は必要か

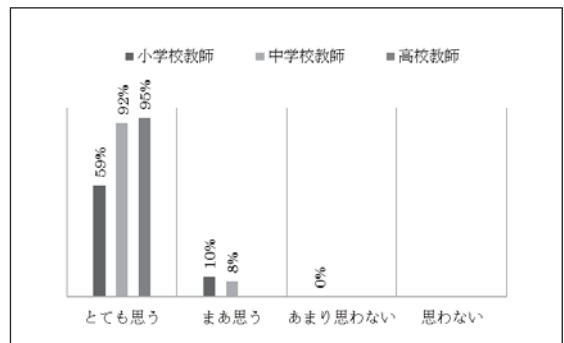


図2 中学校に音楽科は必要か

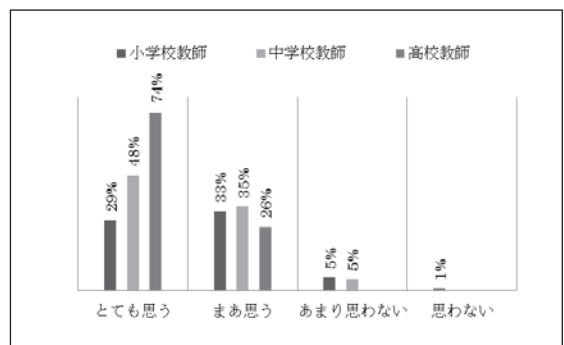


図3 高校に音楽科は必要か

導で重視していることに関する選択肢を挙げ、上位2位までの順位法で回答を求めた。

その結果が図4（小学校教師）、図5（中学校教師）、図6（高校教師）である。

図4、5、6から明らかのように、音楽指導で最も重視していることについて、小・中は共通して「音楽表現を楽しむ」ことが1位となり、高校は「感性を育成する」が1位となっている。ちなみに「感性を育成する」は、小・中で2位回答として最も多いが、1番

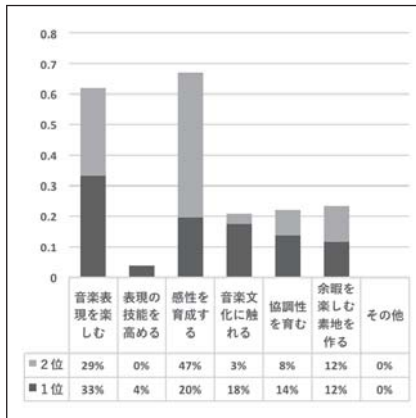


図4 指導で重視していること（小）

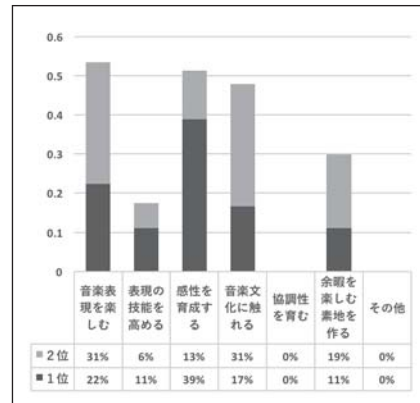


図6 指導で重視していること（高）

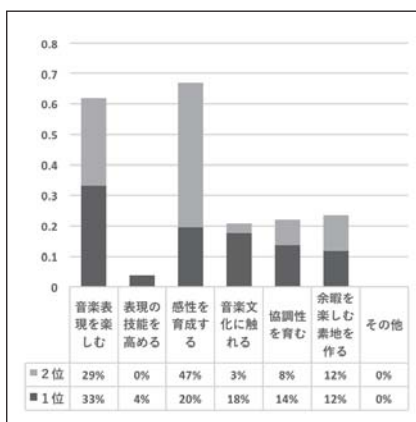


図5 指導で重視していること（中）

中では「感性を育成する」、高校では「音楽表現を楽しむ」と「音楽文化に触れる」が同率であった。この「音楽文化に触れる」への意識は、校種が上がるにつれてその割合が大きくなっている。

各項目を校種別に1位・2位を合わせると、「音楽表現を楽しむ」が小学校では83%、中学校では62%、高校では55%となっており、高い割合ではあるものの、校種が上がるにしたがって、割合は低くなっている。

また「感性を育成する」は、小学校が58%、中学校が67%となり、高校では52%となった。

ここで特徴的な項目であったのは、「表現の技能を高める」である。校種別に1位・2位を合わせると、小学校では18%、中学校では4%、高校では17%と

目との差が大きい。

2番目に重視していることは、前述した通り、小・

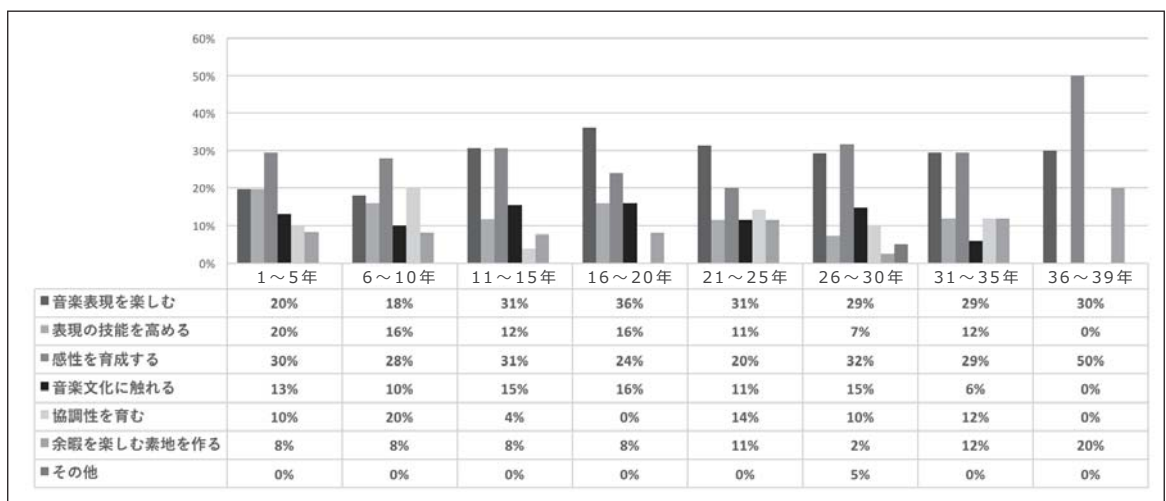


図7 指導で重視していること（教職年数別）

軒並み低い数値となっている。このことから、「音楽表現を楽しむ」については、どの校種の教師も技能の追求する楽しさではなく、単に歌う演奏する楽しさを目指している、ということがうかがえる。

(2) 教職年数別

同じ設問の結果を、教職の経験年数別（以下、「教職年数」とする。）に分類した。それが図7である。

教職年数別に見てみると、「表現の技能を高める」（左から2番目）が、教職年数を重ねるにしたがって、それを重視する割合が徐々に減ってきているのがわかる。一方、教職年数を重ねるにしたがって割合が上がる項目は見られず、「音楽表現を楽しむ」（1番左）は教職年数11年以降、30%前後の割合となっている。また、「感性を育成する」（左から3番目）は教職年数16年～25年が20～24%と若干低い割合であるが、その他の教職年数では、およそ30%となっている。

つまり教職年数別に見ても、「音楽表現を楽しむ」と「感性を育成する」が、教職年数を問わず比較的高い割合を得ていることがわかる。

3. 音楽指導で困難を感じるか

(1) 校種別

図8は、音楽指導で困難を感じるかどうかを尋ねた結果である。

音楽指導に困難を「まあ感じる」と回答した教師が多いことがわかる。「とても感じる」と合わせると、小学校教師が67%であるのに対して、中学校教師が78%、高校教師が79%と、校種が上になるにしたがって、数値が上昇している。

小学校教師の3割強がそれほど指導に困難を感じていないことに比べて、音楽の教員免許を取得しているはずの中・高の音楽教師がより高い割合で困難を感じている現状が明らかとなった。これは、「音楽表現を楽しむ」ことを指導で重視する傾向が強い小学校教師に対し、表現の楽しさを味わうことを前提とするものの、音楽経験を通して感性の育成を目指す中・高の教師が、音楽指導において音楽の追求を行う中で自らの専門性に対峙し、困難を感じていると解釈することができるのではないだろうか。

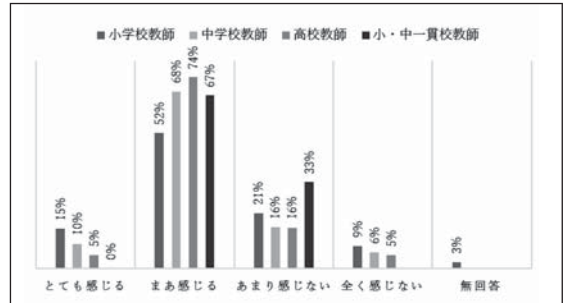


図8 音楽の指導に困難を感じるか

(2) 立場別

音楽専科と担任教師の音楽指導に困難を感じる割合を、図9に示した。

図9を見て明らかのように、音楽専科は困難を感じる割合が68%（「とても感じる」14%＋「まあ感じる」54%）、担任は73%（「とても」12%＋「まあ」61%）であり、担任教師の方がやや困難を感じる傾向にあるものの、大きな差は見られない。

ここから、音楽専科であるか担任教師であるかという立場の違いは、音楽指導に困難を感じるかどうかそれほど影響していないことを読み取ることができる。

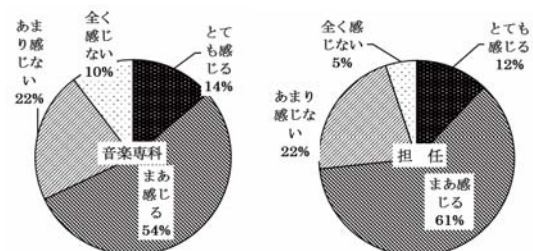


図9 立場別「音楽指導に困難を感じるか」

(3) 校種・立場別

中・高の音楽教師は、教員養成課程で音楽を専攻し、音楽科の教員免許を取得して教師となっているが、小学校の場合は事情が異なる。

本調査での小学校教師の回答者は、その内の51%が音楽専科であり、42%が担任教師であった。このことを踏まえ、小学校以外の音楽専科と小学校の音楽専科、担任の別で音楽指導で困難を感じているかを表2にまとめた。

なお、中学校及び高校教師は音楽専科教師であることから、「担任」は必然的に小学校教師による回答で

ある。したがって、表2では「担任」を【小】に分類している。

表2 校種・立場別「音楽指導に困難を感じるか」

	【小以外】	【小】	
	音楽専科	音楽専科	担任
とても感じる	5%	18%	12%
まあ感じる	64%	49%	61%
あまり感じない	24%	20%	22%
全く感じない	7%	12%	5%

表2から、小学校とそれ以外の校種に分けて結果を見てみると、どの立場においても、指導に困難を感じている教師が約7割であり、3割程度の教師が「困難を感じない」、「あまり感じない」と答えていることがわかる。しかしこの中で、小学校音楽専科教師に着目すると、困難を「とても感じる」、そしてその逆に「全く感じない」と答えた割合が、ほかの校種・立場の教師よりも高くなっていることが特徴的である。

ここから、小学校音楽専科教師には、自分の専門性を生かして困難を感じることなく指導できている教師がいる一方で、困難を強く感じながら指導を行っている教師の双方が存在していることがうかがえる。この状況の背景には、音楽専科制度を採っていない自治体では小学校の音楽専科教師の任命基準が弾力的であり、教員養成課程で音楽を専攻していなくても、校内の教員の中で相対的に音楽経験があれば音楽専科を任せられる場合がある、という実情があるものと考えられる。

(4) 教職年数別

次に「指導で感じる困難」を教職年数別に見てみたい。結果は、図10の通りである。

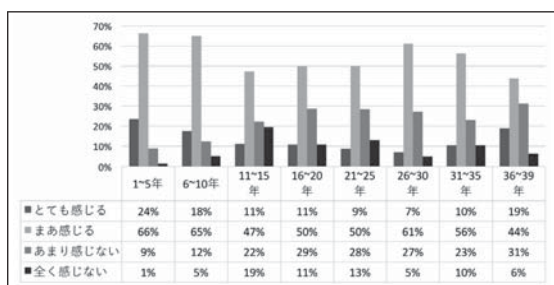


図10 指導に困難を感じるか (教職年数別)

どの教職年数においても、校種別と同じように、指導に困難を「まあ感じる」と答えた教師が圧倒的に高い割合を占めている。一方で、困難を「まったく感じない」割合は、11~25年の経験者で10%を超えているが、初年から5年目では1%しかいない。

さらに困難を「とても感じる」割合は、初年~5年がもっとも高く(24%)で、そこから緩やかに割合が減っていき、またそれに準じて、困難を「あまり感じない」の割合が、徐々に増えている。このことから、現場経験の積み重ねによって、自分の指導技術等に対して自信をもつことができていると捉えることができよう。しかしながら、30年を超えると「とても感じる」の割合が上昇に転じる点については、推察の域を出ないが、児童や社会の変化への対応に困難を感じてきているためと考えられる。

4. 音楽指導で困難を感じる内容

(1) 校種別

アンケートでは、音楽指導において何に対して困難を感じているのかを選択肢を示し、2位回答まで求めた。選択肢は「伴奏や範唱・範奏に伴う表現技能について」、「専門的な音楽知識について」、「教材選択の仕方など、指導内容について」、「指導法について」、「学習者の音楽活動に対して、何を『良し』とするかという自分自身の評価基準について」、最後に「その他(理由は自由記述)」である。なお、「指導法について」では、下位項目として歌唱、器楽、創作、鑑賞を挙げ、とくに困難を感じる分野についての回答も求めた。

1位回答の結果は図11の通りである。

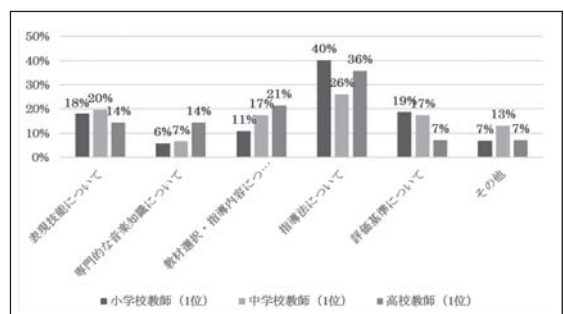


図11 校種別「困難を感じる内容」

小・中・高のすべての校種の教師が最も困難を感じ

ている項目は、「指導法について」であった。また、小学校教師が困難を感じる項目で、「専門的な音楽知識について」が、教師の校種別で見ても最も低い数値となったことは興味深い。小学校教育が、専門的な音楽知識を必要としない内容として捉えられていると推察できる。

中学校教師がおおよそすべての項目に回答が分かれたのに対して、高校教師については、回答数が少ないため一概には言えないが、「指導法について」と答えた割合が高くなっている。

(2) 小学校教師は何に困難を感じているのか

小学校教師について、1位回答と2位回答を合わせた結果が図12である。

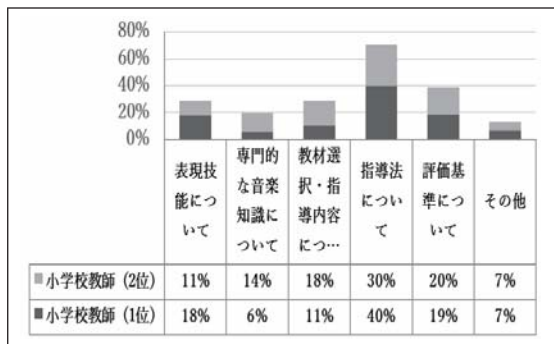


図12 小学校教師が困難を感じる内容

小学校教師が音楽指導において困難を感じる内容の1位回答では、「表現技能について」が18%、「専門的な音楽知識について」が6%、「教材選択・指導内容について」が11%であるのに対して、「指導法について」は40%であり、他の項目と比べて突出して高い数値となっている。

次いで1位回答で高い数値となったのが、「学習者の音楽活動に対して、何を『良し』とするかという自分自身の評価基準について」(19%)であったが、「表現技能について」が18%と近接している。

また、前述した通り、「専門的な音楽知識について」が1位と2位を合わせて、「その他」以外の選択肢の中では最も低い割合となっている。

これらの結果から、小学校教師は「どう教えたら良いのか」という点について、不安を抱いているのではないかと推察できる。「何を」という部分は、教科書

や指導書を参考にすることができても、それを具体的にどのように教えるのか、ということに対して困難を感じているように思われる。

一方、中学校教師も「指導法について」が最も高い割合になっているものの、1位回答は26%に留まり、すべての項目に回答が分散している傾向がある(図13を参照)。

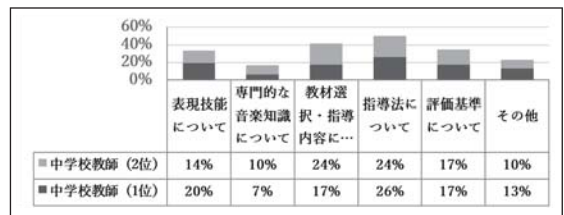


図13 中学校教師が困難を感じる内容

中学校教師の回答においても、「専門的な音楽知識について」は低い割合となっているが、この数字が示す意味は小学校教師のものとは異なるように思われる。なぜなら、このアンケートの回答者である中学校教師は「中学校教員免許状(音楽)」を取得しており、それはすなわち、音楽教師として指導するための教員養成課程を修了していることを意味しているからである。ここから「専門的な音楽知識」の数値が低い原因として、小学校教師では、まず「どのように教えるのか」について困難を感じていること、あるいは初等教育では高い専門的な音楽知識を必要としないと考えられていることが挙げられるのに対して、中学校教師は「専門的な音楽知識」を基本的に習得しているために数値が低くなったと考えられる。

IV おわりに

本稿では、アンケートの設問のうち、選択肢を用いた回答を抜粋して分析を行った。その結果、校種の違い、とくに小学校教師とそれ以外の校種の教師には、音楽指導観に差が見られることが明らかになった。それは主に以下の4点である。

- ①音楽科はいずれの教師も学校教育に必要だと考える傾向がある。とくに初等教育において、音楽科の必要性を教師は感じている。
- ②いずれの校種も、音楽科教育において教師は「音楽表現を楽しむこと」を重視しているが、小学校、中学校、高校へと学年段階が上がるにつれてその

割合は低くなる。

③小学校教師はとくに指導法について困難を感じている割合が高い。また、小学校の音楽専科教師に限っては、ほかの校種の音楽教師と比べて、音楽指導において困難を感じないほどの高い専門性をもった教師と、困難を強く感じている教師にやや分かれる傾向がある。

④「教材選択の仕方や指導内容」について困難を感じるのは、教員歴の浅い教師が多い。

このような小学校教師特有の指導観は、小学校が初等教育であるという教師の認識、現在の教員養成・免許制度、そして個人の音楽の専門性といったいくつもの要因が複層的に影響し合い、形成されているものと考えられる。それゆえに、他の校種とは異なる複雑さがある。

音楽を専門的に学んだ経験がなく、自らの専門性に自信をもてない教師にとって、音楽授業を行うことの困難さは容易に察することができる。教員養成・免許制度の現状から、現在小学校教育において用いられる音楽教科書や教師用指導書は緻密に構成され、教師の指導を導くものとなっている。しかしそれを用いてもなお、教師がもつ音楽指導観は、授業を、そして子どもたちの音楽学習を左右する。

我が国における義務教育の最初の段階であり、また最長の教育期間を有する小学校教育において、音楽を指導する教師の音楽指導観は、音楽科教育の意義にさえ影響を与える。したがって、音楽指導観に関する研究は、初等音楽科教育の在り方、また教員養成課程の在り方の再考に寄与する重要課題である。

なお本稿では、まず一次的な回答結果を示すことを目的としており、回答結果の統計的な分析には至っていない。今後の課題としては、本稿で取り上げていない回答項目、ならびに自由記述の内容も合わせて精査し、アンケート調査からの音楽教師の指導観を一層明示する必要がある。

謝辞

アンケートにご回答いただいた広島県及び熊本県公立学校の先生方のご協力に感謝申し上げます。

付記

1. 本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究C）課題番号

26381240「音楽科教育における教師の評価基盤としての価値体系の解明」（平成26-28年度、研究代表者：古山典子）の助成を受け、行っている研究の一部である。

2. 本稿は、第47回日本音楽教育学会横浜大会にて口頭発表した内容に基づき、再構成したものである。

文献

八木正一（1991）「音楽の授業における教師の意思決定に関する一考察」『埼玉大学紀要〔教育学部〕教育科学』40(1-2), pp. 43-52。

篠原秀夫（1992）「音楽科教師の力量形成に関する一考察：意思決定を中心に」『北海道教育大学紀要 第一部 C, 教育科学編』43(1), pp. 333-344。

高見仁志（2014）『音楽科における教師の力量形成』ミネルヴァ書房, 222P。

高見仁志（2011）「小学校音楽科における教師のライフヒストリー：教師の力量形成の構造と要因」『日本教科教育学会誌』34(2), pp. 31-40。

古山典子（2006）「音楽科教師の指導力形成について—ある教師の価値観形成との関連性に着目して—」第37回日本音楽教育学会発表資料。

古山典子／瀧川淳（2008）「音楽科教師の価値体系の形成について（1）—小学校教諭の音楽観・指導観に関するアンケートを通して—」第39回日本音楽教育学会発表資料。

古山典子／瀧川淳（2009）「音楽科教師の価値体系の形成について（2）—小学校教諭の音楽観・指導観に関する記述回答の分析を通して—」第40回日本音楽教育学会大会発表資料。

古山典子（2009）「小学校音楽科教師の価値観形成に関する研究—授業研究およびインタビュー調査を通して—」『就業教育実践研究』2, pp. 29-42。

瀧川淳／古山典子（2014）「フィールドワークとインタビューの分析を通して音楽指導観の比較研究—小学校教師と音楽家の場合—」第45回日本音楽教育学会発表資料。

古山典子／瀧川淳（2015a）「小学校教師と音楽家における音楽指導観の比較研究」日本学校音楽教育実践学会編『学校音楽教育研究』19, pp. 243-244。

古山典子／瀧川淳（2015b）「芸術家の考える『芸術的価値観』について—音楽家と美術家へのインタビュー調査を基に—」第46回日本音楽教育学会発表資料。

瀧川淳／古山典子（2015c）「小中高における音楽教師の音楽観・指導観について」第18回日本教育実践学会発表資料。

料。

古山典子／瀧川淳（2016）「音楽科教師と音楽家における音楽指導観の比較研究」『福山市立大学教育学部研究紀要』4, pp.21-32。

（2016年10月24日受稿，2016年11月18日受理）